

5章 総合問題5

問題

【1】

A.

全訳

言論と出版の自由についての民主主義の信条は、たとえ我々がそれを生來のもので奪うことができない権利であるとみなそうがみなすまいが、ある複数の前提に基づいている。この前提の1つはⓐ人は真理を知ることを望み、その真理によって導かれたいと思うものだということである。もう1つの前提は、最終的に真理に到達する唯一の方法は、自由市場において、自由に意見を戦わせることによるということである。さらにもう1つの前提は、人間は必然的に意見を異にするものであるから、ⓑ他人にも同じ権利を与えるという条件で人はそれぞれ、自由に、さらに熱烈に激しくさえも自分の意見を主張することが許されていなければならないということである。そして最後の前提とは、このようなお互いの寛容と、様々な異なる意見の比較からⓒ最も合理的だと思われる意見が現れ、広く受け入れられるものであるということだ。

B.

全訳

この宇宙にあるすべてのものは絶えず変化の状態にあるが、これは長年にわたって哲学者や詩人が論評してきた事実である。いかなる引用句集でもパラパラめくってみれば、我々の住んでいる変動の激しい世界についての多くの人の言葉が目に入る。「ⓐすべてのものは流転し、静止する物は何1つない」と古代ギリシアの哲学者ヘラクレイトスは紀元前6世紀に主張した。言語も他のすべてと同じようにこの一般的な変動に加わる。ドイツの哲学者・言語学者ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは1836年に次のように記している。「ⓑ言語には真の意味の静止ということは一瞬たりともありえないが、それは止むことなく燃え続ける人間の情念に停止がないのとまさに同じである。本来それは持続的な発達過程である。」したがって、言語は他のすべてのものと同様、何世紀にもわたって徐々に形を変える。これはなんら驚くべきことではない。人間が年をとり、オタマジャクシが蛙になり、牛乳がチーズに変わる世界では、言葉だけが不变のままだとしたらおかしなことになろう。有名なスイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールは記している。「ⓒ時間はすべてを変化させる。言語だけがこの普遍的法則を免れてよい理由などはない。」ⓓこうしたことにも関わらず、多数の知識人でさえ言語の変化を非難し、憤慨し、言語の変化を不必要なだらしなさや怠慢や無知のせいにする。新聞には投書が寄せられ、立腹した記事が公表されるが、そのすべてが、新しい単語や新しい発音が絶えず生まれている事実を慨嘆している。あるイギリスの新聞のコラムニストは「ⓓ昔の英語は外国人には発音できないけれど大抵は理解できる言語だった。今日の英語は、イギリス人が発音できず、理解できる外国人がほとんどいない言語に急速になりつつある」と主張した。

【2】

ポイント

神戸大学の入試問題より出題。本問には下線部の語や節と同意のものを選択させる設問や、指示語が指すものを明らかにした上で和訳させる設問、内容説明問題も含まれている。また、説明問題にも指示語が含まれていることに注目したい。指示語が表すものをきちんと押さえた上で、文脈を読み取る力を神戸大学が重視していることがうかがえる。

解答

- (1) ⑤ a ⑥ c
(2) 我々が、数十万年もかけて徐々に氷河期に入ったり、氷河期から抜け出したりしているというのは事実ではなかった
(3) 南極大陸が南極に落ち着いてから少なくとも 2,000 万年の間、植物に覆われていて、氷はなかったという事態は、まったくあり得るはずのないことであったのだが
(4) 北極から 10 度以内の高緯度地域では、1 年のうち 3 カ月はずっと暗い日々が続くから。(39 字)
(5) b (6) 「全訳」の下線部①を参照。

解説

- (1) ⑤ここでは 10 万年ほど前からの地球と文明時代の地球の気候とが比較されていて、下線部を含む the stable ~ has known の部分が、後続の rather has swayed between periods of warmth and brutal chill (むしろ温暖期と厳しい寒期を繰り返してきた) と対比されていることに注目する。すると、stable (安定した) と並列になっている tranquil という語は、a calm 「穏やかな」という意味であると考えることができる。b 「危険な」、c 「騒がしい」、d 「安全な」では後の内容と対比を成すことはできないので文脈上不適。
- ⑥下線部を含む文から、ドリアスという植物は氷床が withdraw した時に最初に再群生するものの 1 つであると述べられているので、withdraw は「後退する」あるいは「融ける」というような意味の自動詞であることが推測できる。これにふさわしい選択肢は a backs away 「後退する」である。他の選択肢の自動詞としての意味は、b 「大声を上げる」、c 「整列する；止まる；近付く」、d 「内側に曲がる；中にに入る」である。
- ⑦下線部を含む文の主語の This が指しているのは、前文の内容、つまりグリーンランドの気温が 10 年間で 15℃ も変化して、降雨パターンや生育条件が激変したことである。それが、人口が少ない地球にとっては unsettling であった、という流れなので、この語の意味はマイナスイメージを伴ったものであると推測できる。選択肢の中でそれに相当するのは b disturbing 「気がかりな；不安な」である。他の選択肢の意味は、a 「変わりやすい」、c 「ささいな」、d 「未解決の」であり、文脈上不自然。なお、settle は「落ち着く；静まる」のような意味なので、「反対の動作」を表す un- が付いていることから、おおよその意味を推測することもできよう。
- ⑧下線部を含む文は No less intriguing が「補語」、are が「動詞」、the known ranges ~ が「主語」という構造の倒置文になっている。そして、less という比較級がある

のに than 以下がついていないのは、省略によるもの。no less ~ than …で「…にまさるとも劣らないほど～；…と同じくらい～」の意で、ここでは No less intriguing than this (this = 前文の内容) と補って読むとよい。文脈をさかのぼると、南極はかつて氷がなく緑で覆われていたという想像できないような事態に触れられており、それに続けて第4段落で恐竜の生態について述べられている。選択肢の中で、この南極大陸と恐竜とに関する共通した見方としてふさわしいのは、c interesting 「興味深い」である。他の選択肢 a 「複雑な」、b 「明白な」、d 「あるいは」はいずれも文脈に合わないので不適当である。

- (2) ポイントは問題指示にあるように that の内容を示すことがある。that が指すものは前に書かれているはずなので、該当する部分を探すと、that we moved into ~ years (私たちは何十万年もかけて徐々に氷河期に入ったり、氷河期から抜け出したりしているということ)だと考えることができる。それが the case でなかった、ということなので、case はここでは「実情；真相」という意味の名詞だと考える。「…ということは事実ではなかった」という形にまとめることになる。なお、hundreds of thousands of years は「数十万年」。英語には万の単位がなく、「十万」であれば a hundred thousand となる。この部分に限らずこの英文では多くの数字表現が出てくるので注意したい。
- (3) simply の訳としては「単に」を思いつくかもしれないが、'shouldn't have + 過去分詞' 「…のはずがなかった（が、そうなった）」や、possible 「あり得る」の意から考えて、ここでは「まったく（…ない）」の方が適切である。よって全体としては「そのことはまったくあり得るはずはなかった」となる。
- 次に That が指すものを考えると、直前の For at least twenty million years … covered in plants and free of ice. (南極大陸は南極に移動してきてから少なくとも 2,000 万年の間、植物に覆われていて氷がなかった。) の 1 文だと考えれば文脈に合う。この文中の it は Antarctica のこと。settle は「落ち着く；定住する」、‘remain + 過去分詞’は「…のままでいる」の意である。
- (4) 下線部の That は、Drury 氏が「奇妙だ」と考えている内容なので、「北極から 10 度以内の高緯度にある森が大型獣の生息地となっていたこと」を指している。これがなぜ bizarre (奇妙な) なのは、直後に理由を追加的に表す接続詞の for があるので、for 以下の節で述べられているとわかる。その内容は「そのような高緯度地域は 1 年のうち 3 カ月は絶えず暗い」というものだが、「そのような」ではわからないので、such が指す内容 (= within 10 degrees latitude of the North Pole) の意を補うこと。なお、これに続く「厳しい冬」などの部分は、Drury 氏が直接挙げている理由ではないので、説明に加えるべきではない。
- (5) on a knife edge は直訳すると「ナイフの刃の上に」で、そこから「予断を許さない；非常に不安定な状態の」という意になる。それをふまえた上でそれまでの文脈を追っていくことになる。直前の文には、今後地球が寒冷期へ向かっていくのか温暖期へ向かっていくのかがわからないという内容が述べられている。そして、確かなことは 1 つしかないとした上で、「予断を許さない状況にある」とあるので、文脈から正解は

b であると判断できる。**a** と **c** は「温暖化」と「寒冷化」の一方のみに言及しているので不適。また、この文章には気候の変化へ対応するという議論は一切なく、最終段落でも氷河期の意義を述べているので、**d** も不適当である。

- (6) 〈In the long run〉, 〈incidentally〉, ice ages are〈by no means〉bad news〈for the planet〉.
S V C

incidentally 「ついでながら；ところで；ちなみに」は文修飾の副詞である。in the long run には「結局は」という訳語が当てられることも多いが、もともとは「長期的には；長い目で見ると」という意味である。ここでもそのような訳語を選択しないと文章として不自然である。by no means は「決して…ない」の意。bad news の部分は「悪い知らせ（ニュース）」というよりは「悪い状況；悪いこと」を表している。the planet はここでは「惑星」ではなく「地球」を指す。for は「～にとって」。

全訳

我々は、数十万年もかけて徐々に氷河期に入ったり、氷河期から抜け出したりしていると、長い間考えられていたが、現在ではそうではないことがわかっている。グリーンランドの氷床コアのおかげで過去10万年余りの詳しい気象記録が得られているが、そこからわかるることは安心できることではない。それによると、地球の最近の歴史において、地球は文明世界になってから経験してきたような安定した穏やかな場所とはほど遠く、むしろ温暖期と厳しい寒期の間を行ったり来たりしていることが明らかになっている。

およそ12,000年前、最後の大きな氷河作用が起こった終わり頃に向かって、地球は急激に温暖化し始めたが、その後突然、「新ドリアス期」として科学では知られている出来事である寒期に1,000年間ほど再び陥った。（この名前は氷床が後退した後、最初に大地に再群生するものの1つであるドリアスという極地植物に由来する。古ドリアス期もあったが、それほど厳しいものではなかった。）この1,000年間にわたる寒期襲来の終わり頃に、再び平均気温が20年間で7℃も急上昇した。これはさほど劇的には思われないが、これはわずか20年間でスカンジナビアの気候が地中海の気候に変わるように匹敵する。局地的には、さらに劇的な変化を遂げた。グリーンランドの氷床コアから、その地の気温は10年間で15℃も変化して、降雨パターンと生育条件が激変したことがわかる。こうした事態は人口の少ない時期の地球においては混乱する出来事だったに違いない。今日ではその影響は想像を絶するものになるであろう。

気候は非常に多くの変動要因、例えば二酸化炭素（CO₂）濃度の昇降、大陸の移動、太陽活動などの産物なので、過去の事態を把握することは、将来の事態を予測することと同様に困難である。多くは我々にはまったくわからない。南極大陸を例に取ってみよう。南極に移動してきた後の少なくとも2,000万年の間、南極大陸は植物に覆われていて、氷はなかった。これはまったくあり得るはずのことであった。

これと同様に興味深いのは、後期の恐竜の中で判明している分の生息地域である。イギリスの地質学者スティーヴン・ドルーリーは、北極から緯度が10度以内にある森は、ティラノサウルスを含む大型獣の生息地であったことに言及している。彼はこう書いている。「それは奇妙なことである。というのは、そのような高緯度地域は1年のうち3カ月は暗闇が続くからである。」さらには、このような高緯度地域では冬が厳しかったという証拠が今

では存在する。酸素同位体の研究によって、アラスカ州フェアバンクス周辺の気候は、白亜紀後期には現在とほぼ同じであったことがわかっている。では、ティラノサウルスはそこで何をしていたのであろうか。季節ごとに膨大な距離を移動していたか、あるいは暗闇の雪だまりの中で1年の大半を過ごしていたかのいずれかであった。オーストラリアは、その当時はもっと位置が極地に近かったのだが、そこでは温暖な気候の所へ逃げ込むことは不可能であった。恐竜がどのようにしてそのような条件の下で生き延びることができたのかはただ憶測するしかない。

奇妙なことには、非常に長い期間厳しい寒さが続くという未来像と、同じように長い期間厳しい暑さが続くという未来像のどちらがより起こり得るのかがわからないのである。確かにことは1つしかない。それは、我々は非常に不安定な状態にあるということだ。

① ちなみに、長期的に見ると、氷河期というのは地球にとっては決して悪い話ではない。

氷河期には岩が碎かれて新たに豊かな土壌が残され、土地がえぐられて淡水湖ができる。何百もの生物種に豊富な栄養となりうるもののが供給される。氷河期は生物が移動する推進力の役割を果たし、地球を生き生きとさせてくれるのである。

注.....

- ℓ. 4 ◇ comforting *adj.* 「快適な；安心できる」
- ℓ. 5 ◇ nothing like ~ 「～にはほど遠い」
- ℓ. 9 ◇ abruptly *adv.* 「突然」
 - ◇ plunge into ~ 「～に陥る」
- ℓ. 11 ◇ arctic *adj.* 「北極の」 ⇔ Antarctic *adj.* 「南極の」
- ℓ. 13 ◇ onslaught *n.* 「襲来」
 - ◇ leap *vi.* 「急上昇する」
- ℓ. 14 ◇ be equivalent to ~ 「～に匹敵する」
- ℓ. 15 ◇ exchange A for B 「AをBに換える」
- ℓ. 20 ◇ variable *n.* 「変動要因」
- ℓ. 22 ◇ take ~ *vt.* 「～を例に取る」
- ℓ. 25 ◇ range *n.* 「生息地域；分布域」
- ℓ. 27 ◇ home *n.* 「生息地」
- ℓ. 32 ◇ snowdrift *n.* 「雪の吹きだまり」
- ℓ. 33 ◇ polar *adj.* 「極地に近い」
 - ◇ orientation *n.* 「方位；位置づけ」
 - ◇ retreat to ~ 「～に逃げ込むこと」
- ℓ. 36 ◇ extraordinary *adj.* 「奇妙な」
- ℓ. 37 ◇ perishing *adj.* 「ひどい」
 - ◇ expanse of ~ 「～の期間」
 - ◇ steamy *adj.* 「厳しい；蒸し暑い」
- ℓ. 40 ◇ grind up ~ 「～をすりつぶす〔碎く〕」
 - ◇ scrape out ~ 「～をえぐる」
 - ◇ fresh water 「淡水；真水」 ⇔ salt water 「海水」

ℓ. 41 ◇ nutritive *adj.* 「栄養の」

◇ spur *n.* 「推進力；動機」

【3】

A.

解答

- (a) (1) If I had a little more money, I could buy a new car.
(2) If I were to die now, what would you do?
(3) If I had left a little earlier, I could have caught the plane.
- (b) (1) Suppose you had ten million yen, what would you do with it?
(2) Even a child could do a thing like that.
(3) A real criminal would have acted differently.
- (c) (1) I wish it would stop raining.
(2) If you prepared for your lessons every time, you would get better grades.
(3) If he had taken his doctor's advice, he might still be alive.

解説

- (a) (1) 「もし～であれば、…できるのですが。」という日本文から、仮定法過去を用いた典型的な If S' 過去形 ~, S would [could ; might] … の構文を用いればうまくいきそうだとわかる。「新車が買えるのですが」は、I could buy a new car でよい。「もう少しお金があれば」は、if I () a little more money となるが、上の構文から、() には過去形の動詞 had を入れればよい。
- (2) to が与えられているのがヒントになる。if S were to … (もしSが…するとしたら) という表現を思い出してほしい。この構文を使えば、「もし今私が死んだら」は if I were to die now となる。「どうしますか」の部分は、助動詞の過去形を補い、what would you do? とすればよい。
- (3) 「もし～していれば、…しただろうに。」という日本文から、仮定法過去完了を用いた典型的な If S' had 過去分詞 ~, S would [could ; might] have 過去分詞 … の構文を用いればよいことがわかる。「出発する」には動詞 leave を用いるのが最も自然。start にも「出発する」の意があるが、今日最も用いられている英語、つまり米語では「～を始める」という他動詞の意味で用いるのが普通。「間に合う」は動詞 catch を用いる。あとは、上の構文に当てはめれば、「**解答**」の英文になる。
- (b) (1) Suppose という書き出しが与えられているので、suppose を接続詞として用いて if の代用とする用法を思い出す。この場合、Suppose S' + V' ~, S + V … の形になるが、動詞は直説法でも仮定法でもよい。ただし、ここでは「もし 1,000 万円持っていたら」という現実性の薄い内容なので、仮定法過去にして、Suppose you had ten million yen とする。「そのお金でどうする？」は、how would you spend [use] it [the money]?, または、what would you do with it [the money]? とすればよい。

- (2) Even という書き出しが与えられているので、「子供だって」の部分は Even a child とする。この問題は、主語が条件を表すケースなので、Even a child の後に仮定法過去の主節を続ければよい。「そんなことはできるだろう」は、*could do a thing like that* [such a thing ; that sort of thing] のように表す。
- (3) (2) と同様、主語に条件が含まれるケースである。A real criminal という主語が与えられていて、「…していただろう」と内容が過去のことなので、仮定法過去完了の主節の構文をその後に続ければよい。「違った行動をとる」は *act differently* [in a different way ; otherwise] を用いるのがよい。したがって、(A real criminal) *would have acted differently* [in a different way ; otherwise] となる。
- (c) (1) I don't think it will stop raining. を前提とする仮定法過去の形。will は現在における未来に対する推量を表すので現在形である。この will が過去形になって *would* になったと考える。
- (2) 「君は成績が上がるのだが」という文末から、仮定法過去 (If S' 過去形 ~, S would [could ; might] ...) の形にすればよいことがわかる。「予習する」は *prepare for one's lessons*, または, *do one's homework* でもよい。homework には「予習」「準備」の意味合いもあるというのは常識。
- e.g. do one's *homework* for the next committee meeting
 (次の委員会のための下準備をする)
- 「毎回」は *every* [each] time.
 - 「成績が上がる」は「人」を主語として *get better* [higher] grades [marks], または「成績」を主語として *one's grades improve* と表せる。
- (3) 条件節が過去、帰結節が現在の内容なので、If S' had 過去分詞 ~, S would [could ; might] ... という形になる。「～の忠告を聞く」は、*take* [follow ; listen to] one's advice とする。advice を目的語とする場合、日本語の「忠告に従う」をそのまま英語にして、(×) *obey* one's advice とは言わない。したがって、「もし彼が医者の忠告を聞いていたら」は、if he had taken [followed ; listened to] his doctor's advice となる。「生きている」を表す叙述用法の形容詞は alive であるから、「(彼は) 今でも生きているかもしれません」は、he might still be alive となる。

B.

解答

- (1) A : Let's take a picture here.
 B : Yes, let's.
 A : I'll ask that man to take one of us. Excuse me, would you take our picture, please?
 C : Sure. Does this camera have automatic focus?
- (2) A : Where are the pay phones, please?
 B : Over there, next to the vending machine, on the left.
 A : Would you give me small change for this, please?
 B : Certainly.

解説

(1) 「写真を撮る」は take a picture だから、「ここで写真を撮ろう」は Let's take a picture here. でよい。Let's … という提案に対する同意を表すには, Yes, let's. とする。否定の場合は, No, let's not.

「あの人へ撮ってもらうように頼もう」は、同様に Let's … で表してもよいが、A 個人の「意志」と考えると、「その時点における意志決定」なので, be going to ではなく、will を用いて、I'll ask that man to take one of us. とする。この one は a picture の意。「すみません」は、ここでは呼びかけなので、当然, Excuse me. である。「ちょっとシャッターを押してくれませんか」と言う場合の「依頼」を表す表現である、Would [Could] you …? も、「過去形の助動詞を用いて表現を控え目にする」という仮定法の用法の 1 つである。「いいですよ」は Sure., Certainly., Of course. など。「ピントは自動ですか」は「このカメラは自動的にピントが合いますか」と考えて、Does this camera have automatic focus? とする。実際の会話では、this camera の代わりに it が使われるはずだが、この問題では camera という語がまだ用いられていないので、「解答」では this camera としておいた。

(2) 「ホテルでの会話」と状況が示されているのをヒントにする。「公衆電話はどこにありますか」だが、ホテルには必ず複数の公衆電話が置かれているはずなので、Where are the pay phones? とする。「あそここの自動販売機の隣」は、文法的には next to the vending machine(s) over there となるところだが、会話では「あそこ」「自動販売機の隣」という断片的な情報をそのままつなげて、Over there, next to the vending machine(s) となることが多い。「左側」は on the left でよい。「小銭」は (small) change だから、「これを小銭にして下さい」は「これと交換に小銭を下さい」と考えて, give me (small) change for this とするのが英語の発想。「…していただけますか」は、(1) で用いた Would [Could] you …? とすればよい。「かしこまりました」は Certainly. で、相手が男性なら Certainly, sir., 女性なら Certainly, ma'am. するのが普通。

[4]**解答**

- | | | |
|--|---------------------------|---------------------------|
| (1) cannot [can't] | (2) would rather | (3) have only [only have] |
| (4) would | (5) need not have | (6) should have seen |
| (7) cannot [can't ; couldn't] have got | (8) may [might] have kept | |
| (9) Shall | (10) How can, with | |

解説

- (1) ○ must (…に違いない) ⇔ cannot (…のはずがない)
○ be ignorant of ~ 「～を知らない」
⇒ 「彼女はその出来事について知っていたはずだ。」
= 「彼女はその出来事について知らなかったはずがない。」
- (2) ○ would prefer (for) A to … 「Aに…してもらいたい」

- would rather (that) S 仮定法過去「Sが…する方がよい」
 ⇒「あなたにそこに1人で行ってもらいたくない。」
- (3) ○ all you have to do is (to) … = you have only to … [you only have to …] 「君は…しさえすればよい」
 ⇒「君は指示に従いさえすればよい。」
 ※ only have to … を見慣れていない者も多いと思うが、実は have only to … よりもずっと普通の形である。
- (4) ○ be in the habit of …ing = have a [the] habit of …ing 「…する習慣がある」
 ○ ‘過去の習慣’を表す would 「かつては…したものだ」
 ⇒「かつて彼は私に、子供の頃の話をよくしたものだった。」
- (5) ○ need not have 過去分詞「…する必要はなかったのに(した)」[= didn't have to …]
 ⇔ should have 過去分詞「…すべきだったのに(しなかった)」
 この which の先行詞は前節の内容。
 ○ particular 「項目」
 ⇒「あなたはその項目について説明したが、その必要はなかった。」
- (6) ○ regret …ing 「…したことを後悔する」 (= regret have 過去分詞)
 cf. regret to … (残念ながら…する)
 ○ should have 過去分詞「…すべきだったのに(しなかった)」
 ⇒「その映画を見るべきだった(のに見なかった)。」
- (7) ○ cannot [couldn't] have 過去分詞「…したはずがない」
 ⇔ must have 過去分詞
 It = that 以下。
 ⇒「彼女が数学で90点も取ったはずがない。」
- (8) ○ may [might] have 過去分詞「…したかもしない」
 ○ keep to one's bed 「病気で床につく」
 ⇒「彼女は病気で寝ていたのかもしれない。」
- (9) 相手の意志を尋ねる shall (Shall I …? 「…しましょうか」)。
 口語では Do you want me to …? が普通。
 ⇒「手紙を投函しましょうか。」
- (10) ○ How can [could] S …? 「どうして…ができるか」
 修辞疑問文。肯定の修辞疑問文は強い否定を表す。
 could の方が婉曲な表現だが、We cannot …とほぼ同意の文を作るという問題なので、can を用いる。受動態になっている点に注意。
 ○ put up with ~ 「～に耐える」
 ⇒「どうしてそのような状況に耐えることができようか。」

【5】

A.

解答

- (1) b (2) c (3) b (4) a (5) c

解説

- (1) 「彼はタクシーに乗るべきだ。」
○ ought to … 「…すべきだ」 = should
a 「彼がタクシーに乗ったのは、その必要があったからだ。」
b 「彼はタクシーに乗るのが賢明であろう。」
○ S is wise to … 「Sが…するのは賢明である」
c 「彼はタクシーに乗らなかった。」
- (2) 「彼がタクシーに乗ったはずがない。」
○ cannot have 過去分詞「…したはずがない」
a 「彼は乗るタクシーを見つけられない。」
b 「彼がタクシーに乗るのは不可能だ。」
c 「彼がタクシーに乗った可能性は極めて低い。」
- (3) 「ひょっとしたら、彼はタクシーに乗らなくてはならないかもしれない。」
○ might have to … 「(ひょっとしたら) …しなくてはならないかもしれない」
a 「ひょっとしたら、彼はタクシーに乗る必要があったのかもしれない。」
b 「ひょっとしたら、彼はタクシーに乗る必要があるかもしれない。」
c 「彼はタクシーに乗る許可を得た。」
- (4) 「彼はタクシーに乗る必要があったのかもしれない。」
○ may have 過去分詞「…したかもしれない」
a 「彼がタクシーに乗らなければならなかつたということはあり得る。」
b 「彼がタクシーに乗る必要がなかつたということはあり得る。」
c 「彼はタクシーに乗ることができれば、乗つたかもしれない。」
- (5) 「我々は急ぐ必要はなかつたのに急いだ。」
○ need not have 過去分詞「…する必要はなかつたのに (した)」
a 「我々は急がなかつた、もっとも急ぐ必要はあつたけれども。」
b 「急ぐ必要はなかつたので、我々は急がなかつた。」
c 「我々は急いだ。しかし今ではその必要はなかつたとわかる。」
d 「我々は急がなかつた。しかし今では我々は間違つてゐたとわかる。」
○ mistaken (分詞形容詞) = wrong
e 「我々は急いだ。しかしその必要があつたかなかつたかはわからない。」

B.

解答

- (1) We [You ; I] can't put it off any longer.
It can't be put off any longer.
- (2) This medicine must [should] be kept beyond children's reach. (8語)

This medicine must [should] be kept out of the children's reach. (10 語)

This medicine must [should] be kept out of reach of the children. (11 語)

This medicine ought to be kept out of reach of the children. (12 語)

This medicine is to be kept at the place which children can't reach. (13 語)

(3) We should have left [started] earlier.

(4) Such is the pleasure you give that you cannot come too often.

解説

(1) ○ 総人称の主語をたて、「…わけにはいかない」 → 「…できない」と考えて、助動詞 can を用いる。または It を主語にして受動態で表す。

○ put off ~ = postpone ~ 「～を延期する」

‘～’が代名詞の場合は put ~ off の語順。

○ not … any longer 「もはやこれ以上…ない」 = no longer

(2) ‘義務’を表す助動詞 (must ; should ; ought to) や be + to … を用い、This medicine が主語なので受動態にする。

「子供たち」は、the children なら「特定の子供」で、children と‘無冠詞 + 可算名詞の複数形’ならば無限大を表すというルールにより「一般的な子供たち」を示す。

○ out of reach of A = out of A 's reach = beyond A 's reach 「Aの手の届かないところ」

reach を動詞として用いても可。

(3) ○ should have 過去分詞「…すべきだったのに（しなかった）」

(4) ○ such (~) that … 「非常に～なので…」

such が文頭に出て倒置が起きた形。(= The pleasure you give is such that …)

○ cannot … too ~ 「いくら…してもしすぎることはない」

(= you cannot come often enough)